

## はしがき

この論文は二部構成となっている。第一部には、論者の専門とした日本近代文学の範疇に属する論文をおさめた。(これは、漱石を対象にして、「漢詩と小説との関わり」をテーマに纏めた修士論文、そして、漱石と鷗外との比較の観点に立って、両者の文学的軌跡を漢詩創作から分析して纏めた博士論文を引き継ぐ形で、論者は近年、特に興味を感じたテーマである。)今まで試みてきた方向とは、また違った新たな「笑い」という角度から、日本近代の文豪である漱石の一側面を明らかにしようとしたのである。

第二部には、日本語教師として日本語教育を携わる中、ここ七年来、積み重ねた経験に基づいて書いたものである。近年、高等学校でも日本語が外国語として取り入れられるようになってきている。そればかりではなく、短期大学でも応用課程での日本語学科設置も著しく目立つようになってきた。また、第二外国語として日本語クラスを開設している大学では、日本語を履修する学生も少なくない。台湾において、今はまさしく日本語学習のブームが頂点に至っていると言えよう。こうした中、上手に日本語を話したり、書いたりできる人材が、日本語学科の学生に限られる時代は疾うに過ぎてしまった。日本語学科の学生も、彼等を指導する側に立っている先生も、一言で言えば、日本語教育の多様化と言わざるを得ない、こうした現実を無視できない状況に立たされている。現在、大学における日本語教育の在り方を、もう一度改めて考えるべき時期が来たと思われる。

いずれ大学に入ってからではなく、高等時代からもう日本語を学習出来る時期が来るに違いない。そうすると、大学における日本語教育が、今までの課程を続けるなら、もう時代遅れという感じを免れなくなる。今後は明らかに大学の日本語教育のレベルを、今の大学院のレベルにそれより高い水準に高めないと、特色のない大学の日本語学科は、いずれ時代の流れに身を沈めてしまう運命に遭遇すると予想できる。

従って、今後の大学が日本語教育を展開していく可能性を探る中、この第二部の論文を、その在り方を探っていくに際して、一つの方向として提言したいと思う次第である。